

1: インタビュー

次世代を見据えた研究開発で、 安心安全を守るための環境作りを ボードレスかつシームレスに推進

NTTセキュアプラットフォーム研究所では、「最先端のセキュリティで社会を守る」というスローガンを掲げて、安心・安全な社会実現に貢献するための暗号・セキュリティ技術に関する研究開発を進めている。同研究所の最近のR&D成果や、2020年の東京五輪を安心安全に開催するための研究などについて、所長の梅本 佳宏氏にうかがった。

暗号国際会議「CRYPTO」に 論文が4件採択される大成果

—NTTセキュアプラットフォーム研究所の2014年度の主なR&D成果についてお聞かせください。

梅本 これまでにない大成果として、暗号の理論的な研究における世界最高レベルの国際会議「CRYPTO」に我々の論文が2014年だけで4件採択されたことが挙げられます。暗号は、さまざまなセキュリティ技術を下支えする重要な要素です。暗号の安全性は、計算機の性能向上や攻撃手法の発達によって次第に低下していきます。そのため、10年程度のスパンで代替わりさせる必要があると言われており、当研究所においても次世代を見据えた研究開発を積極的に進めています。CRYPTOへの論文採択は、その成果が現れてきた結果だと考えています。

また、個人を特定されにくい形にデータを加工する「匿名化技術」の新方式を開発したことも大きな成果です。ビッグデータの利活用が進む中、個人に関する情報を含むパーソナルデータの取り扱いが社会的な問

題となっています。パーソナルデータを安全に利活用する技術として注目されているのが匿名化技術です。

従来の匿名化技術はデータの粒度を下げる加工をしていたため、場合によっては適切な分析ができなくなる問題がありました。当研究所では、データの粒度を下げずに安全な匿名化を実現する画期的な匿名化技術（Pk-匿名化）を開発しました。この技術を利用すれば、詳細な分析が必要なケースにも匿名化データを適用できます。当研究所が以前から開発を進めてきた、情報を秘匿したまま各種の統計演算を実施できる「秘密計算システム」などと併せて、パーソナルデータの利活用に道筋を付ける技術であると考えています。

2020年の安心安全を守るための さまざまな研究を推進中

—東京五輪の開催をきっかけに、2020年にはサイバー攻撃などのセキュリティ上の脅威が増加すると予測されています。それに備えた取り組みを教えてください。

梅本 防災・危機管理のための取り組みの一つが、情報共有を促進して



NTTセキュアプラットフォーム研究所

所長 梅本 佳宏氏

迅速な判断を可能にするシステムの開発です。米国でデファクトスタンダードとなっている製品を中核にし、そこで独自の活動ログ処理技術などを加えることで、収集した非定型の情報を整理して分かりやすく表示できる防災・危機管理システムを開発しました。同システムは、防災・危機管理だけでなく、イベント運営やサイバーセキュリティ対策などに幅広く活用できるポテンシャルを秘めています。今後も同システムの開発を継続し、積極的に事業展開していきたいと考えています。

またNTTグループは、2020年に向けてセキュリティ人材を現状の4倍の1万人に増やす計画です。当研究所では、グループの人材育成を支援する活動と共に、組織の枠を超えた日本全体のセキュリティ人材の底上げにつながる活動を始めました。脅威への対応力強化のため、海外のセキュリティ組織との連携も強化しています。こうしたボードレスかつシームレスな取り組みで、2020年の安心安全を実現していきます。

—本日は有難うございました。

(聞き手・構成：末安 泰三)